# おおとり会だより

平成5年4月20日発行
静岡女子短期大学
静岡女子大学
同窓会　おおとり会

## 静岡にくるまでのこと

内藤耕二
（静岡女子大学前学長）

秦鴻四先生にお電話したのが奇縁となって、私はすっかり静岡づいてしまいました。秦先生は戦時中、海軍の航空医学研究所からのおつき合いです。岡崎の岡崎国立総合研究機構という長ったらしい、いかめしい名前の文部省の研究所づとめを終えて、ほっとした所で、久しぶりに秦先生に退官の挨拶をしたのが、静岡との御縁の始まりになりました。

女子大学の廃学が決定して、最後の幕引き学長になってくれないかという話が舞いこんで参りました。永年のお上づかえでやれやれと思っていた私にとっては、一寸した青天の霹靂でした。昔の人のよくゆう「晴耕雨読」しますよという言葉で、いささか見栄を張ってきただけに、この話にはいささか面はゆいものがありました。女子大への再赴任には、二、三回のやりとりがありました。学部長がたや事務局長など、数名の方々の御来訪をわずらわせました。最終的には小田学長までおいで頂くことになってしまいました。

これまで、東京と岡崎の自動車往復の途中、有度山のスロープに一きわ栄える白亜の建物が三、四棟スマートに並んで建っていました。まだ話が十分につまらない中に、私は助手席に長男、後部座席に家内をのせて、まだ見ぬ女子大を垣間見ようと、ひそかに清水インターチェンジで東名高速を降りました。地図でよくしらべて来たせいか、比較的容易に女子大を探しあてることが出来ました。

当時はまだ女子大のまわりには茶畠がひろがり、キャンパスの周りには森がありました。心なごむ風景だったように記憶しております。小田先生から私に托された言葉は、県立大学になっても、文学部だけは残して下さいよということでした。私のいつも心にひっかゝるのは、この御約束を実現できぬまゝに、女子大は県立大学の国際関係学部の一コースとして組まれてしまったことです。バブル経済の崩壊といわれることに、戦後つっ走って来た日本の経済のハード重視があります。生産一偏頭で世界一の工業生産国になったことは、お目出たいことですが、その間、日本人はその古来の心を失ったのではないかといわれています。そろそろハードからソフト面への切りかえが必要となりましょう。おおとり会の建物が県大のキャンパスの一隅にその姿をとどめていることは有難いことです。

（1992年9月　スイスグルイエール・チーズの村山上にて）

## 老爺のたわごと

小田幸雄
（静岡女子大学元学長）

若者は、ゆめをみる。人生がまだ始まったばかりで、拠って立つべき基盤としての「過去」の経験をもたぬ彼らにとって、そのゆめは、いかなる「前提条件」にも煩わされることのない、初々しく、自由な未来への願望そのものであるはずだ。そこに描かれるものは「あるべき」世界のヴィジョン、いま「ある」世界は、いつの日か、その「あるべき」すがたに変容してゆかなければならないものなのだ。

老人は、「過去」と「現在」とにこだわる。彼らの思考は、自らが誇る過去の経験、そして、その「過去」の成果の総集積ともいうべき、「現実」の上に立ってはじまる。彼らにとって、いま「ある」ところのものは、そのままに受容されるべき思考

の「前提条件」、その「前提条件」に適合しないものは、たとえ、それが「あるべき」ものであっても、「非現実的だ」、「ユメだ」、の、ひとことで退けられてしまう。

人の世の歴史の中なる各「時代」にも、このような「老若」の違いがあるようである。「若き」時代は、みずみずしい「ゆめ」を身上とし、「年老いた」時代は、「現実」をふりかざして、若き「ゆめ」を押しつぶしにかかる。

※

一九四五年の初秋、家も書物も焼かれ、空腹を破れた服につつんで、東京の巷を職を求めてさすらっていた時、ふと見上げた空の、澄みきった青さを私は忘れることができない。……地上には、戦争がもたらした残酷極まる破壊と殺戮の爪痕まざまざと目にせまるものがあった。しかし、頭上にあるものは、全くの別世界、虚しくも、美しい空間の果てもないひろがりであった。

戦争が終わるまでの永い年月、日本国民には、「前提なき思考」は、まったく許されていなかった。すべての発言、提言の前には、かならず、「お国のため、」「戦争完遂のため」という前提条件がつけられなければならなかった。その前提条件が音を立てて崩れ去ったいま、頭上に広がる虚しい空間は、「無前提」の思考の自由を象徴しているものとみえたのである。そして、その「無前提」の、いわば若々しい思考の中から、日本国民は、新生日本の出発点としての、絶対平和と民主主義の理念を創りだして行ったのであった。

※

あれから、半世紀、「ゼロ」から出発したはずの、私たちの国は、いま「繁栄」の真っ只中にある。五十年前のあの頃には、夢想だにできなかった豊かな生活が、今私たちのものとなっている。だが、「現在の繁栄」は、常に「現実主義」の思考を生む。目眩ます「現実」の光彩の中に、「ゆめ」や「理想」のかげが薄れてゆくとき、繁栄の時代における思考老化の落とし穴がぽっかりと口を開けるのではあるまいか。

公害に煙る空を見上げながら、そして、国際化時代の忙しい「現象」を追いかけるのに精一杯で、「山のあなた」などという言葉を死語としてしまった、多くのオトナたち、そして若者たちの、言動に胸を痛ませながら、私はいまあらためて、半世紀前のあの日の虚しくも澄みきっていた青空をしみじみと思い出している。

平成五年度同窓会総会は六月六日、別紙案内あり

## このごろ

河村房代
（静岡市古庄五四五）

昨年三月古希を迎え、お陰様で元気に新しい人生を歩み始めました。

十数年来の家事調停委員の仕事も終り、五十年近い大学での教壇生活もこの二月で降りました。責任のある長年の仕事を全うし、安堵と充足感に浸っているこの一ヶ月です。

七時十五分頃起床、二〇分間真向法を基に整体運動、八時頃朝食、続いて朝の連続テレビ小説、それからすぐに日向ぼっこで新聞を読み始める夫を「どうして男ばかりそうしていられるんだ」と思い乍ら雑に家事を済ませ、自分もソファーでどっかりと四種類の新聞に眼を通すと、もう昼食の仕度というこの頃です。これを四、五日続けると何だか妙に人に会いたくなって来るので自分でもおかしくなります。

これからは大学婦人協会、少年友の会、楽寿の園の奉仕、旅行、観劇と多少は人の役にたち乍ら、自適のあとで振り返ってみた時、良い思い出の多い人生を終えられたらなあと願っています。

## 近況

榛葉良之助
（島田市湯日九三）

私が大学を退職してはや五年、非常勤を終わって三年が過ぎました。その間、女子大学もその歴史を閉じ県大は既に二回の卒業生を送り出しています。歳月の流れの速さに驚いているこの頃です。数日前島田市民病院の看護学校の卒業式に招かれ、卒業生の皆さんに「先生の話は三年間で全て忘れてしまったが、お酒の話だけは良く覚えています」と云われ苦笑を禁じ得ませんでした。

最近養鰻の視察で台湾の高雄に行って来ました。今迄は浜名湖、吉田うなぎ等と云われておりましたが、今では高雄うなぎ、マレーシアうなぎ等と皆様の口に入るうなぎも国際的になったようです。台湾の最南端ガランピ岬では激流バシィー海峡を望み少し感傷的な気分に浸りました近況と云えばそんなところです。

## 勲三等瑞宝章叙

**藤田先生祝賀会**

〈おめでとう藤田先生〉

藤田純男先生は、平成四年秋の叙勲において、永年教育功労者として勲三等瑞宝章を叙勲されました。叙勲を記念して、平成五年一月三十日ターミナルホテルにおいて祝賀会が行われました。

# 各科だより

## 短歌との出会い

夏目雅代
（短大英文科八回卒）

早いもので、私が短歌に関わり始めてから十年になろうとしている。若い頃から漠然とした興味はあったが、ほとんど何の知識もなかった私が、けんみんカルチャーセンターの高原博先生の短歌講座に入会し、手ほどきを受けたのが最初であった。

在学中の先生の哲学の御講義は、カント、デューイという名前位しか覚えていない私だが、この短歌講座で実作指導のかたわら話して下さった「西行」とか「良寛と貞心尼」などのことは、今でもいきいきと心に残っている。あの頃の先生はとてもお元気に見え、ちょうど良寛が貞心尼と和歌を交換しはじめた年令と同じ位でいらしたのではなかったかと、今にして思う。

裏を見せ表を見せて散るもみぢ

この良寛最後の句を先生は、まるで御自分のことのように情熱的に話された。子育てで十五年あまりを家に籠っていた当時の私は、先生のお話をとても新鮮に興味深く聞いた。短歌とは自分で作るという楽しみだけではない、短歌を作り続けた人の一生を、自分の一生と重ねあわせて考えるという楽しみもあるのだということを、その時始めて私は教えていただいたように思う。

その後、先生主宰の「短歌個性」に入会を許されて一年あまり、先生は忽然と亡くなってしまわれた。

現在私は、高嶋健一先生が運営委員長をしておられる短歌結社「水甕」に入社、そこで勉強させていただいている。全国誌である「水甕」は、高嶋先生を頂点に社友約二千名、静岡、清水を始め各地で月一回活発な歌会が開かれている。その中にあって私などほとんど河原の石のひとつぶといった感じだが、先生の懐の深い御指導を頂き、私にとって短歌はますます大切なものとなっている。

今思えば、歌人として識られるこんなに立派な二人の先生のおそば近くに学びながら、そのことを全く知らずに過ごした若い日の無知が悔まれてならない。若さとはこんなにもったいない時間の浪費を平気でしてしまうものなのかも知れない。

○眼を細め糸通しゆく針穴にやがて
　住むべき孤島が見ゆる
○見えぬもの見ゆる気がする湿原を
　ドミノ倒しのやうな風ゆき
○屈かぬまま海に漂ふわが手紙いつ
　からかひとはさかなと呼びゐる
○マニキュアの乾ききるまでぶらぶ
　らの手がもて余す春の宵やみ

## たくさんの出会いに支えられて

斎藤多紀子
（短大被服科一回卒）

短大を卒業してはや四十年、一回卒の私達は還暦を迎える歳となってしまった。先頃、河村先生の古希のお祝と併せて、クラス会を開き、先生を囲んで、皆で頑張りましょうと励ましあった。四十年の月日は、人それぞれ、生活や環境により、個々に育てられていくものだなと痛感した。私も秦先生のご指導で生活改良普及員となり、農村の生活改善の仕事に情熱を燃やした。若輩者が、婦人会の人々に料理講習や、台所改善等を指導する事が仕事だった。でも毎日毎日が勉強で、理想の生活を追い求める事で夢中だった。生活習慣、人間関係、温かい心等を肌で感じ得る貴重な体験ができたのもこの時期で、ひっこみじあんで無口だった私の大転換期だった。出産を機に県庁退職、主婦専業十七年後、再び産休の生活改良普及員をお手伝いし、ぼちぼちと仕事に復帰する結果となった。県の消費生活相談員を経験し、現在の静岡新聞社・SBS静岡放送事業局の仕事に転職したのも、生活改良普及員の先輩が新聞社に入り、その後任として勧められたためだった。生活改良普及員を経験したお陰で、県内の各所で後輩が活躍している中を、同窓生という事で親しく話ができ協力して頂いたり、時にはお手伝いしたりする事ができたのも幸いだった。現在は、文化事業の中で「茶華道学術講座」と「万葉講座」を担当し、著名な講師の方々と接する機会も多く、仕事としての誇りと、多くの受講生の方々との出逢いに幸せを感じている。回りの人々からは「趣味と実益を兼ねていゝわね」とよく云われるが、傍目ほどではない。子育てが一段落し、再就職という良い条件に恵まれ、とに角健康に過せた事に感謝している。女子短大、女子大の名前は終止符をうっても、同窓生としての誇りを持ち、心の支えとして「おおとり会」を大事にしていきたい。

# 各科だより

## 緑のシャワーとハーブの香りにつつまれて

平野　美恵子
（短大食物科七回卒）

三月の明るい陽ざしの午後、館山寺温泉の北、浜名湖を望む高台にある浜名湖グリーンファームに出かけた。ここには、三百種類のハーブと二百種類のベゴニアの温室五棟が広い敷地に並び、囲りには料理用、染色用、薬用と分けた露地ハーブ園もあり紫色のラベンダーがあちこちで風にそよいでいた。温室の中は天井一杯の緑と花と香りの世界。大きな温室を緑で仕切った九十席のレストランで専務の宮野ちひろさんにお話を伺った。

（ハーブ園での宮野ちひろさん）

**Q** 女子大を卒業してからは、出身が愛知県なので名古屋市内の小学校の栄養士を九年やっていました

**Q** ハーブ園を始めたいきさつは、みかん栽培に見切りをつけ、ヨーロッパに視察を重ねハーブ園の経営を研究中の夫と知り合い二人で開園準備をしたんですよ。オープンの翌月が結婚式で同時進行だったので目のまわる思いをしました。

**Q** それから四年半たってどうですか

最初はハーブって？という出発で私自身も名前や栽培方法を覚えるのが大変でした。漸くハーブに対する世間の認識が定着して苗の注文がふえ、都田のテクノポリスでは造園の中にハーブが取り込まれたり、ホテルの料理用の注文や、医療用の需要も増えてきています。四月十日には初めて八十五名の結婚パーティをこのレストランでハーブ料理のフルコースで引き受けました。食物料出身の私の腕の見せどころと張切っています。

**Q** 日常の仕事の様子は、

今は大勢の人達にハーブの良さを知ってもらうために浜松市内の公民館や花屋さん、豊橋の中日文化センター等で講座を開き、園内のアトリエでも染色やクッキー、石けん、家庭料理での利用の仕方などを教えたり、会社経営の仕事も種々あり帰宅が八時すぎになり主婦業との両立が仲々むづかしくって。

**Q** 将来の計画や夢は、

これからの生活環境を考えて自分の欲しいものは自分で栽培する形態が増えていくと思うのでその手助けをしたいと思っています。夢は大きく浜名湖をエーゲ海に見立ててハーブ園の発展を考えています。

（まだ三十代の若さでハーブに人生をかけた意欲みなぎる宮野ちひろさんにエールを送ろう。そして緑のシャワーと落着いたハーブの香りを一杯ありがとう!!）

宮野　ちひろ
（大学食物科十回卒）

国文科

## 大津山先生の講演を聞いて

昨年八月二十三日国文科同窓会に於て、大津山国夫先生が「武者小路実篤考」をご講演下さいました。

先生が実篤から学ばれたことは「自分はこの世の中に唯一人折角生まれてきたのだから、かっこ良くなくても良いし、人にとやかく云われても気にしないで、自分なりに人生を大事に生きていけばいい」ということでした。実篤の人となりを余すところなく云い表わされた言葉、作品からその人となりが浮き彫りにされ、とても勉強になりました。

大津山国夫先生
（千葉大学文学部教授）

# 総会だより

平成四年度総会が六月七日（日）に県立大学小講堂で開かれました。

総会議事終了後、講師の林洋子さんによる「いのちの持ち場」と題した講演と、宮澤賢治の「よだかの星」が林さんのきたえられた朗々とした声でタンバリンと共に語られ、会場の感動を呼びました。懇親会は管理棟食堂で立食パーティで行われ、会員一五三名に十四名の恩師の先生方も加わりなごやかな雰囲気で旧交を暖めました。本年は六月六日(日)別紙案内の通りです。

## お知らせ

美尾先生の遺稿集が発行されました。
『熟願冷諦』　静岡県出版文化会
『記要』　静岡県立大学
御希望の方は、お問い合せ下さい。

※名簿発行・注文受付開始
短大・女子大全卒業生が載っています。
一部2500円（送料500円）
**振込先　名古屋　9－24671**
静岡県立女子大学女子短期大学
同窓会おおとり会　宛
振込用紙に名簿購入と書き入れて下さい。
※テレフォンカードの残り少々あり。

## 訃報

静岡女子大学元学長、名誉教授斉藤久雄先生には、病気療養のところ平成四年十二月五日ご逝去なされました。ご冥福をお祈り申し上げます。

発行　〒422 静岡市谷田395 静岡県立大学内おおとり会同窓会事務局